

※11月29日に向けてダ～ツシュ!

道

2024・11・13

通信 No 1806



◆本日の練習 6時30分～ 岡野中学音楽室 小坂先生・二宮先生
ぶどう色のショール あなたに会ったとき 鶴 百万本のバラ その他

◆11月20日(水)の練習 6時30分～ 岡野中学音楽室 清水先生 小坂先生
ブオルガの舟曳歌 ドナウ河のさざ波 他全ての楽譜

「リンゴ」

<団員状況(11月13日現在)> 35人

S1-5人 S2-5人 A1-6人 A2-6人 T1-3人 T2-1人 B1-4人 B2-5人

退団 A1 斎藤さん A2 早坂さん

千曲川旅情の歌

小諸なる 古城のほとり
雲白く 遊子(ゆうし)悲しむ
緑なす 藜(はこべ)は萌えず
若草も 籍(し)くによしなし
しろがねの 衾(ふすま)の岡辺(おかべ)
日に溶けて 淡雪(あわゆき)流る
あたゝかき 光はあれど
野に満つる 香(かおり)も知らず
浅くのみ 春は霞(かす)みて
麦の色 わずかに青し
旅人の 群(むれ)はいくつか
畠中(はたなか)の 道を急ぎぬ
暮行けば 浅間も見えず
歌哀し(かなし) 佐久(さく)の草笛
千曲川(ちくまがわ) いざよう波の
岸近き 宿にのぼりつ
濁(にご)り酒 濁れる飲みて
草枕 しばし慰(なぐさ)む

歌詞の意味・現代語訳(意識)

小諸城址のほとりで
白い雲を眺め 悲しくたたずむ旅人(藤村)
新緑のはこべもまだ芽吹いておらず
若草もその上に腰を下ろせるほどではない
白銀の雪が敷き積もる山辺で
薄く積もった雪が陽に溶けて流れていく
日差しは暖かくなってきたが
野に満ちる香りはない
春霞が浅くかかるのみで
麦の色はわずかに青い
幾人かの旅人の群れが
あぜ道を急ぎ通っていく
日が暮れて 浅間山も見えなくなり
佐久地方の草笛の音が哀しく聞こえる
千曲川に漂う波の
岸に近い宿屋に入り
濁り酒を飲み
しばらくの間 旅愁を慰める

島崎藤村のこの詩は私が大好きな詩である。この詩を訪ねて何度小諸へ行ったことだろう。いや、小諸ばかりでなく私の「旅こころ」に大きな影響を与えた詩であった。

今こうして取り上げていても、胸が熱くなり旅への誘いを強く感じる。

この詩には作曲もされているはずで、昔ラジオで一二度聞いたことがある。私にとってこの歌を口ずさむだけで十分であるが、歌はまた別の世界が広がるのかもしれない。もしどなたがその楽譜をお持ちの方がおられましたら、見せていただきたいとお願いする次第です。 増田やすし 2022年6月12日